ずいそう

アテネ紀行雑感

川　嶋　潤　二

どうゆうわけか，娘がシンクロナイズドスイミングでオリンピックに出場するということで，現場が忙しい中，皆様に頼み込んで真夏のアテネに応援に行ってきた。

ギリシャは地中海性気候で，気温は35度を超えるときもあったが湿度が低いためかそれほど暑くは感じなかった。昼間暑いためもあってか，競技は陽が沈み始める夕方7時から9時半ごろまで行われ，ツアーバスで一時間ほどかけてホテルに帰り，夕食を取るとほとんど夜半を過ぎてしまっていた。バカンスシーズンということもあって，食事する店は，夕方8時ころから午前1時過ぎまで営業しており，午後12時過ぎでも人の話し声が響いており家族でアフターファイブを楽しんでいる情景も見た。風呂でも入ろうものなら寝るのは午前2時過ぎで，かつ競技開始までの昼の時間が空いている為，ギリシャ観光が組み込まれており，6時30分から朝食に間に合うように起き10時集合のギリシャ観光をして夜7時からの競技を応援し寝るのは午前1時過ぎという非常にハードな10日間であったが，どこかで関係がある（もちろんシンクロ関係の輪の中であるが）30人のツアーであったため充実した日々であったと感謝している。

ギリシャ人はのんびりしているが逆にいえばいいかげんであると日本人のガイドが言っていた。ギリシャの人に言わせると，「職がなくてもOUZO（ウゾ：ギリシャの地酒で日本で言えば焼酎で，かなりきつい香りがする蒸留酒）があれば生きていられる」というほどの温暖な気候ではしょうがないかなと納得し，日本に寒い冬が巡ってくることに感謝したり，恨んだりもした。ちなみに，OUZOをお土産に買ってきたが，帰ってきて読んだガイドブックには肉体労働者の酒と書いてあった。

ギリシャは河がなく，海への土砂流入がないからエーゲ海がきれいであるという。そういわれれば花崗岩質の地肌ばかりで，水の流れた跡はあるが河が見当たらなかった。これから地盤の老齢化に伴いエーゲ海への土砂や排水の流入が進み，今の状態がどこまで続けられるか，変な推測もしてしまった。

土木屋の宿命で，どうしても土木関係に目が行ってしまう。高速道路はオリンピックのために急遽作ったということで，片側3車線の路肩の広い道路であつたが，急造である為か舗装の継ぎ目が多く目立ち，切土部分も斜面を切り取ったばかりで，日本では考えられないような部分もあったが，逆に工事途中なので気持ちが落ち着くような変な気持ちを覚えたのも事実である。競技場も完全に完成されたわけではなく，土のままの部分も多くそれを見て逆に気持ちが安らぐようなところがあることを発見した。日本人は，きっちり区切りをつけて進んでゆく性格だと思うが，未完成・工事中の良さを見直してもいいのではないかと思う。いいかげんに？プロセスの中の生活をエンジョイしてゆかないと，突っ走っていて最後に自分の人生を振り返ったら何もみえないような我々の人生とは別な魅力も感じた。

古代オリンピックの冠は，オリーブの冠が優勝者へ，月桂樹の冠が二位へ送られたと聞いた。娘の冠を見せてもらったが（これは国外持ち出しを許されていたそうである）オリーブでしっかりと作られており日本で優勝者に送られる月桂樹の葉の茂りすぎた冠と比べると特に素敵に見えた。やはり歴史の重みを真似すべきではないのかなとも思った。

オリンピックは通常の大会に比べて雰囲気が異なり，独特の雰囲気をかもし出していた。娘も今まで世界水泳や，各国のオープン競技に出場しており慣れていると思っていたが，入場前には手足が震えてしまったといっていた。親はそれ以上に緊張してしまい，競技が終わったとたんドッと疲れが出てしまった。全競技を各国の国旗を背負って戦うということがすばらしいと思ったと同時に，娘に嫉妬さえ感じた。表彰式後競技場の上と下で一言娘と言葉を交わしたが，我が子がいまだにメダリストであるとの事が信じられない気持ちである。シンクロナイズドスイミングというマイナーなスポーツの割には激しい競技で，華麗さを苦しい中でどのように表現してゆくのか，わが娘ながらまた尊敬してしまう。

いままで娘の競技の応援に何回か顔を出しているが小学生のとき国内のジュニアオリンピックという競技に初めて参加したときチームの演技についてゆくのが精一杯で，娘のミスがチームの点数につながるため，ビデオを撮りながら非常にどきどきしたことを覚えているが，オリンピックは国の点数につながるため，今まで以上に親として緊張してしまった。日本人の悪い癖で，メダルが取れなかったら…など，娘には「金」を取って来いと言いながら，親として不遜な気持ちがあつた事は否めないが，予定通り銀メダルを取れてほっとしている。ちなみに，ロシアの演技は素人目に見ても素晴らしいものだったと思う。娘は北京を目指すと決めて練習に励んでいるが，上があることは当人にとって幸せなことと考えている。小生も一度は中国の壮大な歴史に接してみたいと昔から思っていたので，また応援に行ってみたいと考えている。

何はともあれ，アテネオリンピックの感動を経験させていただき，次は三国志の中国を楽しみにしている毎日である。

――かわしま　じゅんじ　株式会社熊谷組東北支店
三本木原トンネル作業所――